

「超高齢化社会で生きていく」

長浜市立びわ中学校 三年

橋本 環（はしもと たまき）

先日、祖父が亡くなった。誤嚥性窒息。それが祖父の死因だった。祖母が口に運んでくれた夕食を詰まらせてしまったのだ。

昔から過度な喫煙、飲酒を繰り返していた。かなり弱っていたとはいえない急な出来事だった。

祖父は外に出ることもなく、口数も少ない。普段思っていることを口に出さな

い分、毎日欠かさず言ってくれた帰宅後の「おかえり」と就寝前の「おやすみ」に祖父の

思いが詰まっていたのだと、今になって思う。祖母の話によると、祖父は私や弟の帰りが遅

いと心配してくれていたそうだった。物音がな中にも、優しいさのあふれる人だった。

元気だった祖父の様態が急激に悪化したのは、今年の二月頃。祖母は一人でトイレやお

風呂に行けなくなったり祖父をずっと支え続けたり。日に日に疲れていく祖母を思い出す度に

今でも私は心を痛める。休日は私の両親も祖父の介護に精を出した。そんな両親は、息子夫婦が同居していたから、介護としてはまだマシな方だったと思う。

高齢化が進んだ日本では、息子や娘が都市部で就職し、一人暮らしを余儀なくされ、孤独死してしまう高齢者や、老人ホームに入ったのはいいものの、コロナ禍で家族との面会ができないまま亡くなってしまう高齢者がたくさんいるそう。

そのような状況を見ると、長年共に歩んできた祖母に最期まで寄り添われ、自宅で家族に看取られながら天寿を全うした祖父は幸せ者だったと思う。

超高齢化社会に突入した日本が抱える介護や高齢者の問題は大きい。両親は祖父の介護申請を行っていた。しかし、介護士の方の訪問を終え、介護申請が通ったのは申請後一か月以上が経った。祖父が亡くなる一日前だった。それは日本の介護士不足によって起こった。

たことである。政府は今年、介護関係の職に
 就く人の給料を上げる政策を打ったが、高齢
 化が進み、介護の需要が高まっていく地域ほ
 ど、介護士などの若手の担い手が不足してい
 る。
 そんな現状を変えるためにも、私は収入面
 のサポートだけではなく、介護の仕事に対し
 て抱かれています。3K（きつ・汚い・危険）
 のイメージから脱却する必要があると考
 えた。小学生の時に訪問した地域の介護施設
 には、耳が遠いお年寄りや何度も同じことを
 聞き返す入居者さんに対して、大きな声でゆ
 っくりと話しかけたり、根気強く説明したり
 するスタッフさんの姿があった。その中でも
 入居者さんは人生の先輩なんです。と笑顔
 で話すスタッフさんの姿は、特に印象に残っ
 ている。
 私は、それまで介護職に対してブラッ
 イメージを抱いていた。しかし、その経験に
 よって、介護職の大変さを理解した上でも、

私の中の介護職への印象は一新された。イン
 ターネットで調べてみると、3K(きつい
 ・汚い・危険)から3A(温かい・安心
 ・安定)に変えていく動きがあるそうだ。そ
 のためには、現場の人たちの声をもつと届け
 ていくことが有効であると感じる。
 このように、介護士の担い手増加を目指す
 取り組みなど、政府や行政が今以上に進めて
 いくべき課題は山積みだ。
 では、私たち中学生が出来ることは何だろ
 うか。お手伝いをする、地域行事に参加する、
 挨拶をするなど簡単なことから始められる。
 ただ、何をやるにしても、その根底に高齢者
 への感謝の気持ちや伝えようとする姿勢が大
 切だと考える。私の周りには、高齢者の多く
 は、私がまだ幼か、た頃、お世話をしてくれ
 ていたり、畑で採れた野菜を分けてくれてい
 たり、何らかの形で私を支えてくれた方ばか
 りだ。今までお世話になり、助けてもらった
 人たちを次は若い世代の私たちが助ける、昔

